

(別紙様式3)

令和6年度あいちラーニング推進事業研究報告書【重点校】

学校番号 116
学校名 愛知県立 刈谷東 高等学校
校長氏名 脇田 廣信

研究責任者職・氏名	教諭	
研究テーマ	ICT を活用した主体的・対話的で深い学びを実現するための授業改善	
本年度の研究目標	1. 課題の発見から解決に向け、ICT を活用した主体的・対話的で深い学びを実践する。 2. ICT を活用した授業改善に積極的に取り組み、各教科間で情報共有をしていく。 3. 研究成果は公開し、ICT を活用した授業改善の方法を他校と共有する。	
研究の実施内容		
実施月日	内 容	備 考 (対象生徒等)
令和6年 5月 2日	第1回教育課程委員会(概要説明)	教務・教科主任 教務・教科主任
令和6年 6月 19日	第2回教育課程委員会(計画確認)	
令和6年 6月 28日	県教育委員会に研究計画報告	研究責任者 教務・教科主任 研究担当
令和6年 7月 29日	第1回連絡協議会	
令和6年 8月 23日	第1回推進委員会(各教科への内容説明)	
令和6年 12月 11日	公開授業・研究協議会	研究責任者 教務・教科主任
令和6年 12月 26日	第2回連絡協議会	
令和7年 1月 14日	第2回推進委員会(各教科より研究実践の報告)	教務・教科主任 教務・教科主任
令和7年 3月 下旬	第3回推進委員会(1年間の研究実践のまとめ)	
研究成果の評価及び普及・還元に関する実績		
1. ICT を活用した主体的・対話的で深い学びを実現するための準備 令和5年度よりあいちラーニング推進事業西三南地区重点校として、授業改善を進めるために校内あいちラーニング推進委員会を設置した。本委員会において、研究計画の立案や研究に関する情報交換、主管校や他重点校における研究の実際や ICT 利活用の方法について共有する場としており、各教科主任から各教科への伝達を行うことで校内における研究成果の普及と還元をはかった。本年度では全教科において研究を行った。		

2. ICT を活用した授業改善と情報共有のための環境づくり

(1) ICT 環境の整備

令和3年度より学校全体での ICT 利用が着実に進んでおり、その中で分かった改善点を検討したうえで、環境改善を行っている。具体的なところでは、プロジェクターの各教室への配備に伴いワイヤレスディスプレイアダプターを整備する、Sharepoint の利用を推進するなどより利便性の高い環境づくりにつとめている。

(2) ICT 利活用状況の確認とノウハウ共有

前年度の状況を踏まえ、各教科において現状の ICT 利用状況の確認を行った。ICT の利用を漸進しているため実施者が自覚しないうちに有用な知見の蓄積が期待される。そのため、教育課程委員会などの機会を利用し、ICT 利用状況の確認と共有を行って、研究事業の一助となるようはかった。

3. 公開授業の実施

(1) 実施日

令和6年12月11日(水) 11:20~13:20

(2) 担当者並びに実施教科・科目

教科	科目	担当者
国語	リベラルアーツ国語	教諭
地歴公民	公共	教諭
理科	科学と人間生活	教諭
数学	数学I	教諭

(3) 研究協議会

実施教科教員への指導助言・質疑応答:

愛知県立安城高等学校 教頭

参加者:

愛知県立刈谷東高等学校 教頭

司会進行 教務主任

授業担当 教諭

教諭

教諭

教諭

教諭

4. 本校における研究指定教科の取組

実践報告（担当教科：国語）

1 はじめに（授業の課題と目標）

本校の生徒は年齢も国籍も多様で、実に多くの考え方、感じ方をしている。その中にあって、1年生の現代の国語では「対話」「他者理解」を課題として、主体性を持った自己表現、他者との協同ができるようになることを目標としている。まずは自分の考えを持つこと、そしてそれを他者に伝えられる生徒になってほしいと思っている。そのためにはできるだけ多くの他者の意見・考え方に触れることが肝要である。教材を読み、課題に取り組むことで自己の考えを表現し、それを他者と共有する作業を繰り返すことで多くの生徒が少しでも考え方のばを上げられることを目指した授業実践を行った。

2 授業実践

本校の1年生はまだ日本語に不慣れな生徒も多いため、現代の国語では定期考査を行わず、授業内の課題提出によって評価している。中学校時代に課題提出が習慣づけられていない生徒も多く、また日本語の読み書きが十分でない生徒も多い中、課題のみで評価をつけなければならないことは正直不安が大きかった。そこで、今年度は課題の提出をロイロノートを通じて行うことにしたところ、非常に効果が高かったように感じられた。

本報告では ICT を利用した課題提出、情報共有におけるメリットについて記した。

メリット① 多様な生徒に適している

教材を終了するたびに、課題の提出を課した。ロイロノートで課題を作成し、資料箱から生徒がそれぞれに課題を取り出して取り組み、提出箱に提出するという手順で行ったものである。

【資料1】



外国にルーツを持つ生徒にとって、ICT を利用した課題提出は非常に取り組みやすいという点が挙げられた。漢字圏でない生徒にとっては漢字を書くことそれ自体の心理的ハードルが高く、自分の考えをまとめるところまでいきつかない。ところが ICT を利用した課題については、自分で書く必要がないうえに変換、翻訳機能があるため、母国語にかなり近い感覚で課題に取り組む様子が見られた。もちろん十全な日本語ではないが、主体的に自己の考えを表現するという目標は達成できたといえる。日本人の生徒に対しても自分の字にコンプレックスを持つ生徒、学習障害傾向のある生徒にとって ICT を利用した課題提出は取り組みやすかったようだ。

メリット② 提出率が高い

書くことへの抵抗が少なくなった分、提出率も従来のプリントに比べて高くなった。また授業中に提出を求め際には、リアルタイムで未提出の人数がわかるため、生徒も刺激されて提出する様子が見られた。

また紙媒体の課題は返却後の確認が難しかったが、ICT 利用の課題では返却後もデータが手元に残るため、繰り返し見直すことができるなど、教員にとってもメリットが大きかった。

メリット③ 内容の共有が簡単にできる

先に述べたように 1 年生の現代の国語では「自分の考えを持つこと、そしてそれを他者に伝えられる生徒」の郁育成を目標としたため、できるだけ多くの意見に触れる機会を増やすことを心掛けた。課題の多くは自分の意見を持つことを目指すものだったが、提出して完了するのではなく、それを他者と共有するところまでを課題と考えた。

ロイロノートでは提出された課題を、それぞれが好きなペースで確認することができるため、外国ルーツ、日本人を問わずじっくりと読み込み、他者の意見に対して感想を述べる様子が多く見られた。教員側として特に強調したい意見、取り上げたい意見については画面共有することで一斉に読ませることもできる。多くの他者の意見に触れるという目標も達成しやすかった。

3 まとめと課題

ロイロノートを活用した課題の提出は生徒にとっても教員にとってもメリットが大きく、今後も続けていきたいと思わせるものだった。特に外国にルーツを持つ生徒にとって文章が書きやすいという点は課題取り組みに対するモチベーションを上げるものだと感じた。今後は課題に対してだけでなく、発表やグループワークなどにも活用していきたい。情報を共有するツールとしてロイロノートは非常に有益なものだと思う。

実践報告(担当教科:地歴公民)

1 はじめに

今回、本校のあいちラーニング推進事業の地歴公民担当として、また初任者として本校の生徒の実態に合わせた「主体的」で「対話的」な学びを実現するために、今年度様々な方法を思案し実践した。その中で以下は公開授業として行った研究授業の内容を示す。

2 実践報告

(1) 本時の授業内容の流れ

今回は、第1学年の公共科目「平和主義とわが国の安全」について、研究授業を行った。「公共」という科目に対して苦手意識を持っている生徒が非常に多い。その理由として「身近な生活に直接関係がないから」というものが多く挙げられる。そこで、今回はロイロノートを活用してスライドを作成し、さらにロイロノートのアンケート機能を使って、生徒の意見を学級全体に反映させ、考えを深める授業を構成した。

まず最初に、1945年に終戦するまでの間、太平洋戦争や原爆に関する資料をスライドで示し、そこから平和主義に関する内容や、それについて規定されている憲法9条の内容について復習を行った。

次に、戦後の反省を踏まえ、日本の国土を守るために組織された自衛隊の発足に至るまでの流れや、自衛隊に関する内容について解説した。

また、自衛隊が憲法9条の「戦力」に該当するかどうかについては、政府の立場として「自衛のための必要最小限度の実力であり、憲法9条で禁じられた『戦力』ではない」という意見があることを解説した。それらを基に、生徒たちは改めて自衛隊が憲法9条の「戦力」に該当するかどうかを考える問題提起を行った。

その際、3つの発問を用意した(図1～図3参照)。これらの発問をもとに、10分間ロイロノートのアンケートに回答するよう指示し、答えに困っている生徒にはタブレットを活用して調べさせる指示も出した。

その後、アンケート結果を全体で共有し、学びを深めた。最後に、振り返りを行った。



図1(ロイロノートのアンケート Q1に対する解答結果)

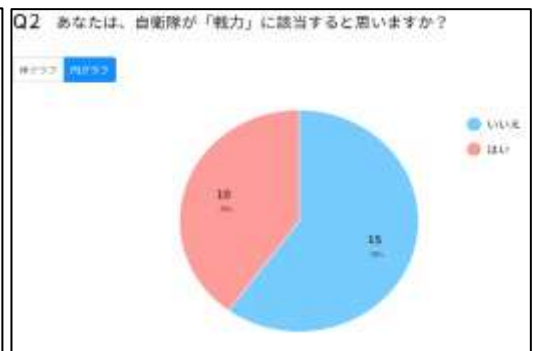


図2(ロイロノートのアンケート Q2に対する解答結果)



図3(ロイロノートのアンケート Q3に対する解答結果)

(2) Q1に対する生徒の反応及び反省点

Q1 を発問した意図は、まず政府の見解を生徒に理解させるために行った。この内容はタブレットを用いて調べさせなければならなかったため、タブレットを活用して正確に解答した生徒もいれば、どのように解答すればよいか困っている生徒もいた。授業後、ロイロノートのアンケート結果を確認したところ、発問の仕方を改善すべきだと感じた。「具体的に指すか？」という問いよりも、「とは、何か？」という表現に変更すべきだった。

(3) Q2・Q3に対する生徒の反応及び反省点

Q1 を踏まえて、Q2 の「あなたは、自衛隊が『戦力』に該当するかどうか(図 2)」という発問を行ったところ、意見が半分に分かれた。その理由を問う(図 3)際には、意見に筋が通っている生徒もいれば、時間が足りず未送信のまま授業が終了した生徒もいた。生徒の様子をさらに見ると、特に Q1 の質問が難しかったため、多くの生徒が苦戦しており、その影響で Q3 の解答に苦労している様子が見受けられた。そのため、10 分間の時間を確保した後に、さらに 2 分間を追加して実施した。内容をもっと噛み砕いて説明する必要があり、また机間巡視をしている際、問いに対する解答がずれている場合もあったため支援をさらに充実させておくべきだったと反省している。

3 まとめ

今回の内容はとても難しく、身近な生活に実感しづらいものだったが、それでも生徒たちは一生懸命授業に取り組んでいた。この授業が終了した後、私の授業を見てくださった先輩教師からは「少しずつ進化している」と言っていただく一方で、「まだ足りていない部分が多い。準備不足だ」とご指摘をいただいた。どちらかという後者の意見に対して、私は実感した。例えば、内容の分かりやすさや対話の充実、指示が全体に行き渡ることが必要だったといった、多くの意見や課題を見つけることができた。この「公共」という科目は 2 単位と単位数が少なく、時間も限られている。その中で、公民の「公共」という科目の教材研究を充実させ、公共が面白いと思ってもらえるよう、他校の愛知ラーニングに参加し、自分の中に落とし込んでいきたい。

実践報告(担当教科:理科)

タブレットを用いた授業の有用性(科学と人間生活)

1 研究のねらい

今年度、第1学年「科学と人間生活」の授業において、タブレットを用いた授業を行った。従来の板書による授業ではなく、クラウドサービスであるロイロノートを用いて授業を行い、一人一台端末を有効に用いた双方向的な授業を行った。試みの結果、生徒に及ぼす影響や理解度の変化等をアンケートによって調査した。生徒が効率的に学習できるような指導形態を検討することが本研究の狙いである。

(1) 効率の良い指導形態の検討

黒板をノートに書き写す授業スタイルでは「書くこと」が目的になりがちである。そこでロイロノートを使い、書くことは最小限にとどめ、物質の画像や、実験の動画等を積極的に配信し、視覚に訴えて理解を促すような授業展開を進めた。プラスチックの単元においては、ペットボトルの加熱実験を動画で撮影し、ロイロノートで配信した。

「資料1 ロイロノートでの実験映像配信」

「資料2 Powerpointで作成した図形②」



(2) 双方向的な授業の検討

講義型の授業では生徒が受け身になりがちである。そこで、一人一台端末に生徒が直感的に操作できるような課題を配布し、能動的な活動を促した。そうした課題は、ロイロノート上に一挙に集約できるため、評価の効率化も図ることが可能となった。

「資料3 ロイロノートで配布した課題①」

「資料4 ロイロノートで配布した課題②」



2 まとめ

アンケートの結果、「タブレットを用いた授業は黒板の授業に比べてわかりやすい」という項目で72.8%の生徒が「そう思う」「まあまあそう思う」と答えており、理解度を深めることに有効な手立てであることが分かった。また、「タブレットで画像を見るとわかりやすい」「タブレットで動画を見るとわかり

やすい」という項目では、それぞれの項目で88.6%の生徒が「そう思う」「まあまあ思う」と答えており、画像や動画をみて、化学的な現象をイメージすることができた。自由記述欄には「目が悪いので、タブレットだと助かる」「画像や映像でイメージしやすかった」などと書かれており、弱視や、外国籍の生徒に対しても、タブレットで授業を行うことが有効であることが分かった。一方で「黒板で授業をするのと大して変わらない」「ラグがあったり、トラブルがあることがある」などの意見もあり、ICT を用いた授業ならではの利点を探していく必要があると感じた。今回は授業に関するアンケートをとるまでになってしまったため、今後は、考查結果との相関関係についても調査し、指導と評価の一体化を図れるように努めたい。年間を通して、ICT 機器を用いて授業を行えたことに一定の手ごたえを感じているが、一方で授業準備の時間に膨大な時間を要する等の課題も見つかった。

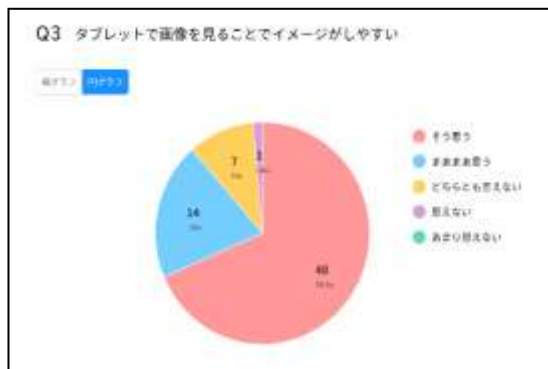
「資料5 アンケートの結果①」



「資料6 アンケートの結果②」



「資料7 アンケートの結果③」



「資料8 アンケートの結果④」



実践報告(担当教科:数学)

1 はじめに

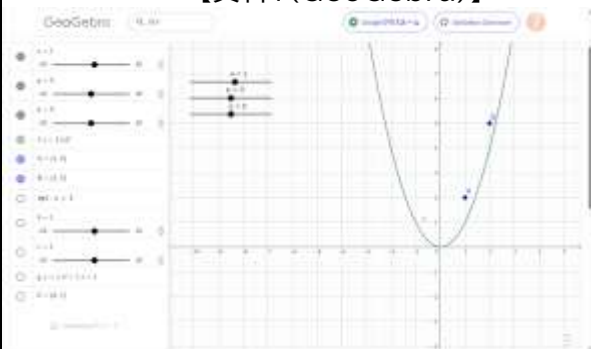
本校のあいちラーニング推進事業の数学担当として、また初任者として「主体的」「対話的」な学びを実現するために、今年度様々な方法を思案し実践した。その中で以下は公開授業として行った研究授業の内容を示す。

2 実践報告

第1学年の数学Ⅰ(第2章 2次関数)にて「2次関数の決定」の内容の研究授業を行った。対象の生徒は2次関数のグラフについて苦手意識をもつ者が多く、その補助としてグラフアプリ「GeoGebra」を用いた。2点を与えた状態では複数のグラフを描けてしまうことから、全員のグラフを一致させる条件を考察した。実施形態としてグループ活動を用いたため意見交換等で対話的な活動は実施できた。生徒の反応としては、概ね想定していた活動が実施でき、「理解しやすかった。」、「楽しく活動できた。」といった感想が9割を占めていた。

また、今までは主に板書主体の授業を行ってきたが、PowerPoint を活用しスクリーン中心の授業を行った。まとめの際に、2点だけだとグラフが複数描けてしまう状態を動画で投影できたことも利点だったように感じられる。改善点としては、ロイロノートやカメラを活用してよい活動を行えているグループを投影するなど ICT を Live の状態で活用できたのではないかと考えている。

【資料1(GeoGebra)】



【資料2(ロイロノート)】



3 まとめ

定時制ということもあり、単位数は2単位なので時間的余裕も限られる中、教科書の内容を超えた発展的な内容に生徒たちはよく頑張ってくれたように思う。今後も限られた時間の中で最大限の活動ができるよう教材研究や授業改善等で私自身も自己研鑽していきたい。

実践報告(担当教科:情報)

1. ロイロノートを使った板書による授業

(1) 概要

情報の授業、特に実習においては生徒がタブレット PC を使い作業をする。そのため内容の指示・説について授業者側もタブレット PC を用いて行ったほうが理解しやすいと想定して用いた。またその流れで座学においても「あらかじめスキャンした PDF」「教科書会社が配布している PDF」などをロイロノートに取り込み、授業において提示しながら板書を行った。

(2) 授業者からみた利点

拡大縮小が容易にできるため座席の位置による見づらさに対応しやすい
色の変更が容易なためチョークの不足に悩まされない
すべてロイロノートのクラウド上に保存されるため、過去の板書を簡単に参照できる
資料の展示が容易であるため参考資料を使いやすい

(3) 生徒の反応

具体的な個所の提示がされるため、問題を解くなどの指示が通りやすくなった。
漢字の板書について書き漏らしが少なくなった。

2. Moodle を用いた課題の出題・回収・採点

(1) 概要

情報の授業における課題は半分以上が実習における制作物の提出である。以前は制作物をプリントアウトさせ、それに対して採点を行っていたが、(主に大学等で使われる)学習支援システムである Moodle を利用して制作物の雛形ファイル配布・制作物提出・採点までを行うようにした。また、夏休みの課題については Moodle の小テスト機能を使い出題した。

(2) 授業者からみた利点

制作物に必要なファイル自体をアップロードしておくことにより、USB メモリなどを用いて配布する手間が削減される。また、環境が整っている生徒なら自宅で課題を行うことも容易である。
課題提出・未提出の確認が容易である。また提出時間によってソートできるため、期限よりかなり早く提出した生徒から、期限ギリギリの生徒まで切り分けやすい。
課題設定時にルーブリックを用いた採点形式を選べるため、生徒にとっても事前に採点基準を提示(これは設定で非公開も可能)できる。ルーブリックにより採点基準が統一されるため複数の教員で課題点検の分業が容易である。
小テスト形式は自動採点され、結果を CSV で取得できるため業務量の削減に効果的である。

(3) 生徒の反応

実技課題について、生徒用タブレットを用いて空き時間に自習する姿が見られた。また、課題が手早くこなせた生徒は授業進度より先の課題や発展的な課題を主体的に学習できた。
夏休みの課題について、満点を取れるまで自主的に何回も挑戦したという報告が生徒から上がった。

実践報告(担当教科:英語)

1 今年度の重点的取り組み

授業科目は英語コミュニケーションⅡで本校 3 年生対象である。主体的な学び(「自ら学びたくなる授業」)に向けて、メリハリを付け生徒の意欲的な取り組みを促すことを中心に取り組んだ。具体的には英文の音読のとき、ペアワークを行う時間を確保し、その延長線上にパフォーマンステストを関連づけ、それを生徒の主体的な学びにつなげていくことにした。教材に合わせて PowerPoint を使用し、学力の差が大きい生徒たちがお互い助け合い、自ら進んで学んでいけるような授業を行った。

2 授業のねらいと方法

ア 授業のねらいは学力差のある生徒たちが、教材を通して、いかに飽きずに、また諦めることなく、自ら進んで学んでいくことができるかということ。

イ 方法としては、生徒が教科書の題材を学ぶときに、パフォーマンステストを 1 つの到達点と位置づけ、主にペアワークという形態において、PowerPoint を使用しつつ、学力差のある生徒たちをサポートしながら授業を進める。最終的にはパフォーマンステストにつなげるが、そこに至る過程も注視する。

3 工夫した点

ア ICTの活用として PowerPoint を使用したが、スライドを作るときに生徒の学力に応じて基礎・普通・応用のものを用意した。使用するとき、必ず基礎編から提示し、生徒のやる気を損なわない工夫をした。また学力の高い生徒が飽きることがないように、やり応えのある問題の提示も行った。

イ 漢字にルビを振るなどで、スライドを作成した。英語の学力がある生徒も外国籍からくる日本語能力不足のため、簡単な漢字の読みが苦手な生徒がいたためである。

ウ 英語力も日本語力も十分ある生徒には、タブレットを使用し、英英辞典のアプリを使い英単語を調べさせ、その単語の用例を調べさせた。新たな語が出る度に、生徒たちは自分で調べるようになっていった。

エ 生徒のパフォーマンステストに至る過程については、レベルを各自に選ばせた。5 つのレベルに分けることで、英語が得意な生徒から、苦手な生徒まで、自分のレベルでチャレンジできるようにした。

オ パフォーマンステストに臨むにあたり、何回練習を行ったかを確認をした。その回数をパフォーマンステストの評価に反映させることで、英語を苦手とする生徒のモチベーションを上げるようにした。

4 今後の課題

ア 主体的な学びに向けて、生徒からのフィードバックは用紙を利用したが、今後はロイロ等を使用するのが生徒への提示が簡単になると考えている。

イ スピーキングテストでのチャレンジを 1 つの到達目標にはしているが、本来はそこで学び得た英語力を自らのコミュニケーションスキルとして「深い学び」(探求的な学習)につなげていくことが重要であると考え。例としては、自分の興味関心を他者に伝えるなどのアクティビティに発展させる等である。

ウ 生徒がタブレットを使用するとき、自分のIDが分からないもの、充電が不足して使用できないことがあった。常に使用できるような指導が必要である。

実践報告(担当教科:家庭)

1 はじめに

多様な生徒がいる中で座学及び実習を行うにあたり、ICT を活用し、より生徒が理解しやすく、効率よく取り組めるよう、授業改善をすすめている。今回は実習後のレポート提出について報告する。

2 ICT を使用した授業について

3年生「家庭総合」、4年生「生活デザイン」、特別講座「家庭総合」、選択 D「家庭基礎」の生徒を対象に、Google Classroom を用いて、調理実習後のレポート作成、提出をさせた。

3 生徒の実際の反応、期待すること

以前は用紙に記入をさせていたが、本校生徒は書くことに苦手意識を持つ生徒が多く、記入内容が単純なものになってしまうことが多かった。また、実習直後に記入するため、用紙が汚れたり、水に濡れたりするリスクが大きかった。Google Classroom での提出にしたことで、実習終了後、教室で落ち着いた状態で入力することができ、実習の振り返りや感じたこと、次回の課題について自分の言葉でしっかり入力できた生徒が多かった(資料)。さらに、スマートフォンのアプリからアクセスできる生徒は、自宅で作成・提出し、8割以上の生徒が提出できたクラスもあった。

しかし、タブレット端末の管理(充電やパスワード管理等)が難しい生徒も一定数おり、そのような生徒は従来の紙媒体で対応したため、チェックが煩雑になってしまった面もあった。

(資料)

10月 30日(水) 調理実習記録

氏名

○実習内容
高級肉練とアーモンドクッキー作り

○持ち物について (〇をつける)
・エプロン ○持ってきた・忘れた
・三角巾 ○持ってきた・忘れた

○実習について

自分が行った作業
高級肉練を1人で作り、食感先いをした。

自分が行ったことに点数をつけるなら
100点中 100 点

その理由
グループ2人しかいなかったのに手際よくおいしく作れた。
前日より持ち物も早く、丁寧にできた。がんばったので私たちのグループがHPです。

今後の調理実習を通して思ったこと、感じたこと、次にがんばりたいことなど
工程ごとに役割分担するより、料理ごとに分担したほうが手際よく終わった。両がちょっと切りにくかった。次週望みたいことは調理工程を飛ばさないこと！今回はすごくよくできた！

10月 30日(水) 調理実習記録

氏名

○実習内容
モンタネロソース・アーモンドクッキー

○持ち物について (〇をつける)
・エプロン ○持ってきた・忘れた
・三角巾 ○持ってきた・忘れた

○実習について

自分が行った作業
モンタネロソースの材料の準備、下ごしらえ
アーモンドクッキーの材料の準備

自分が行ったことに点数をつけるなら
100点中 50 点

その理由
今日は2人でやらないといけない状況で、他のグループより完成がかならなかったが、前回のよう調理方法を正確にグループで協力して行えたから。

今後の調理実習を通して思ったこと、感じたこと、次にがんばりたいことなど
今後の調理実習前は前回の反省を生かしてグループ全体で材料調達や調理方法の準備材料を整理していました。その結果、完成はかたまりなかったり材料調達や調理をスムーズに行うことができて嬉しかったです。次回は、この課題を忘れずに手際よく調理を行います。

4 まとめと課題

Google Classroom を利用したレポート提出は、生徒が主体的に取り組むことができるとともに、ペーパーレス化、業務の時間短縮につながり、非常に効果的な方法であると確認できた。今後は、画像等もレポートに添付できる形をとりたいと考え、ロイロノートの活用も検討したい。

実践報告(担当教科:芸術(美術))

1 はじめに(授業の課題と目標)

表現したいものを技術面で表現しきれないもどかしさを解消すべく、「Canva(キャンバ)」を利用した。「Canva(キャンバ)」は、ポスターやカード、プレゼンテーション用のスライドなど、さまざまなデザインをつることができる Web アプリケーションである。美術Iで学んだ色彩に関する知識や、伝達表現方法の豊かさ、効果的な画面構成の方法などを生かし、美術IIの授業で名刺の作成を試みた。

今回使用する「Canva(キャンバ)」は教育現場でもよく使用されている。文字の配置や色の変更などがスマートにでき、生徒にレイヤーの知識がなくても勝手に作業内容がレイヤーに分かれるので修正・変更などがストレスなくできる。また、テンプレートや素材も豊富で、自分のイメージに合わせた選択が可能である。素材の組み合わせによって表現のバリエーションは無数である。

普段、手作業で色塗りや製図をしている作業感覚とは全く別の制作方法である。自分の意図するものをきちんと相手に伝わるように制作することを本授業の目的とした。名刺を作成するにあたって、ただ素材を組み合わせただけのものにならないよう、細部への意識を怠らないように指導していく。

2 授業実践

美術IIを選択している3・4年生は1・2年次に美術Iを履修している。基本的な知識・理解のベースがあるため、

課題の芯をうまくつかむ生徒が多い。今回も「Canva(キャンバ)」を初めて利用する生徒ばかりであったが、最初の1時間の基本的なレクチャーで概ね作業に難なく操作できる様子であった。名刺完成まで含めて全6時間の予定で実践した。名刺作成にあたっては名前は自分のものを使用し、その他の住所・郵便番号・電話番号・HPのURLなどは学校のものを示し、使用した。



(名前の部分は加工してあります)

名刺を作成するにあたっては、自分をどういう印象に見せたいかをよく考えてアイデアを出させた。部活に熱中していることが一目で分かる・興味のあるものが説明しなくても名刺交換の際に相手に伝わる。自分の雰囲気と渡す名刺の印象を合わせる、など様々な工夫が見られた。思い描いた表現にストレスなく寄せていくことができるため、生徒の取り組みもとてもよかった。出来上がった名刺をそれぞれ鑑賞しあう姿はとても微笑ましかった。名刺の印刷物としての側面を意識させるため、制作したデータをPDFに変換し、クラスルームに提出させた際には塗り足しやトンボなどを意識させた。

3 まとめと課題

生徒にタブレットが支給されたことによって、表現ツールが広がった。今回使用した「Canva(キャンバ)」は学校だけでなく、スマホからも作業できるため、自宅に帰ってからも熱心に試行錯誤する生徒も見られた。

場所を選ばず思いついたときに表現できる点は何物にも代えがたい。ただ、最初の「これを作りたい!」という明確なビジョンがないと、素材に合わせた作品になってしまう恐れもあるため、動機付けの部分で多面的なアプローチが必要である。

予算の都合でカラー印刷が大量にできないため、今回は名刺というとても小さなデザインを行ったが、今後はチラシや雑誌の表紙などよく目に触れるが実際作ってみると気づきの多いものなどにも取り組ませてみたい。



実践報告(担当教科:保健体育)

1 はじめに

保健体育科では、令和5年度より、ICTを積極的に活用した授業に取り組んでいる。教員のパワーポイントを使用した授業展開や生徒の調べ学習、Google Classroomを利用した課題学習・提出など多岐にわたる。

2 実践内容

○課題

Google Classroomを利用し、課題を課している。ドキュメント(Word)やスプレッドシート(Excel)を課題内容に合わせ選択し、作成している。提出も同じくGoogle Classroomを使用している。

google classroomの授業ページ↓



レポート内容(知識・技能)→

・精神疾患の病名を8つ挙げること
うつ病
統合失調症
不安症
摂食障害
睡眠障害
認知症
薬物依存症
アルコール依存症

レポート内容(思考力・判断力・表現力)→

・精神疾患の早期発見や早期治療をするために、どのような意識や行動が必要か。(200字以上)

自分は精神疾患にならなから大丈夫だったり、自分の心は強くないと思いついてしまうと、相談や援助を求める行動が遅れてしまい精神疾患になってしまうと分からないから、普段から自分が精神疾患になるかもしれないと意識することが大切なことだと思いました。精神疾患にならないために日頃から自分の心に気を配りもし精神疾患になってしまったときに、友達や家族に相談することも大事でもし症状が長引くのであればカウンセラーや医者などの専門家に相談する行動が必要です。

○授業

授業では、パワーポイントを活用している。保健は視覚的に活用できる教材が多いため、写真やグラフなどを活用し、見てわかる授業を心掛けている。

○発表

後期(9月から3月まで)の授業では、調べ学習とその発表をおこなっている。生徒は、インターネットで情報を集め、パワーポイントで資料を作成する。発表は、小グループ(2~4名程度)でおこなう。本校の生徒の特性(人前に立つことで極度に緊張するため発表が難しい生徒など)を加味し、このような方法をとっている。資料作成・発表準備に4時間程度、発表に1時間、合わせて5時間程度でおこなっている。提出は、課題などと同じく Google Classroom を利用している。

3 活用している教員の意見

「わかりやすい授業」が、写真などを利用することでおこなえていると感じている。課題の回収や返却も容易であり、授業を休んだ生徒への連絡も簡単におこなえている。操作を覚えることの手間や、システム上のトラブルがある場合での手間などはあるが、総合的には非常に便利である。

4 生徒の様子

操作を覚える手間やトラブルによる手間はあがあるが、現代の子の電子機器への慣れもあり、大きな混乱もなく利用できている。発表時に作成するスライドの出来が良い生徒も多く、質の高い発表がおこなえている。

5 まとめ

教員、生徒ともに ICT をよく活用でき、授業の質が高まっていると感じられている。今後も活用し、さらに良い授業ができるよう質を高めていきたい。

実践報告(担当教科:商業)

1 はじめに

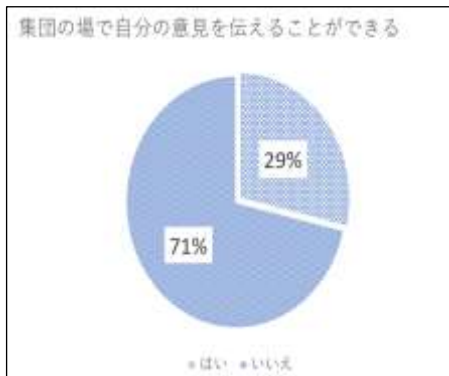
普段から「教科書で教える」授業に加え、生徒同士で考えさせるケースメソッドを取り入れるようにしている。主体的・対話的な学びはもちろん、分析力や問題解決能力を高めることが狙いである。しかし、本校の生徒は他者とコミュニケーションをとることが苦手な生徒が多いと感じる。そのため、ロイロノートでの意見集約・学習活動などを取り入れることによって生徒の意識がどのように変化するのかを考察した。

2 授業実践 対象生徒:21名

従来の「対面型」と ICT を活用した「非対面型」の授業を比較する。
※どちらもケースメソッド(題材は異なる)を使用

3 事前調査

生徒のコミュニケーションに対する実態を知るために4月当初にアンケートを実施した。以下、結果を示す。



<結果>

- ・自分の意見を伝えることができる生徒が約3割。
- ・自分の意見を伝えることに抵抗がある生徒が約7割。

<生徒の意見(「いいえ」と答えた生徒)>

- ・話をする時に注目されるため抵抗がある。
- ・人と話すと緊張してしまう。(苦手意識がある)
- ・自分の意見が正しいのかが不安に感じてしまう。
- ・相手がどのような反応をするのかが気になってしまう。

4 「対面型」の授業展開

実際に起こった出来事(ケース)の主人公になったつもりで考え、課題解決のためにどう行動するかを考え、グループで討議し話し合う。手順は以下のとおりである。

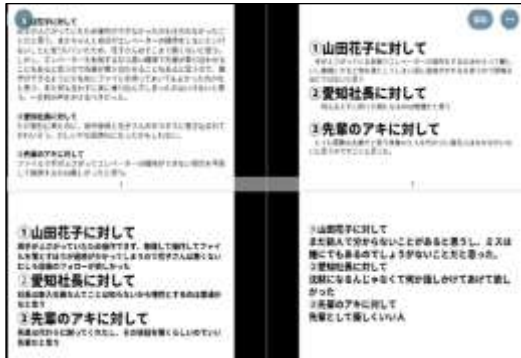
- ケースとアサインメントを事前に配付し、予習をさせる。
- ケースに対して自分の考えをまとめる。
- アサインメントごとに5~6人でグループ討議し、自分の意見をまとめる。
- 全体討議を行う。教員が司会をし、アサインメントを一つずつ進め、発表させる。
- 今回の授業で気づいたことや学んだことをまとめる。



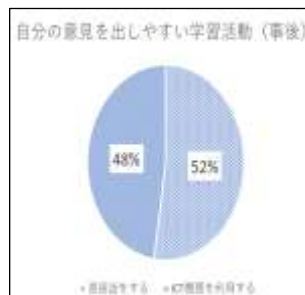
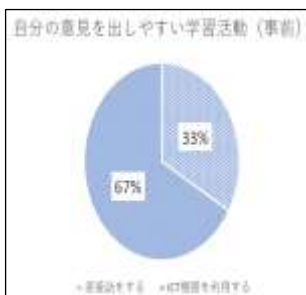
5 「非対面型」の授業

「対面型」の授業展開の手順はほぼ変わらないが、発表方法・全体討議をロイロノートを使用した。手順は以下のとおりである。

- (ア) ケースとアサインメントを事前に配付し、予習をさせる。
- (イ) ケースに対して自分の考えをまとめる。
- (ウ) 意見を集約したものをホワイトボードに投影し、全体討議をさせる。
- (エ) 今回の授業で気づいたことや学んだことをまとめる。



6 生徒の感想(授業後のアンケート結果より)

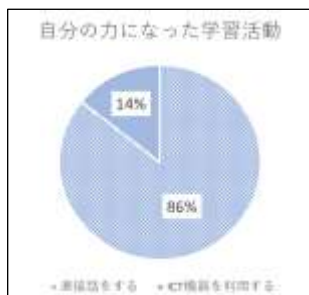


＜事前＞ICT 機器を利用した場合

- ・直接話をしないので気持ちが楽。
- ・情報社会であるため、メールやチャットでのコミュニケーションが取れば良いのではないかと。

＜事後＞ICT 機器を利用した場合

- ・自分の意見は直接伝えた方が良い
- ・メールやチャットには限界がある。



＜ロイロノートを使用した学習活動(メリット)＞

- ・面と向かって話さなくてもよいため気持ちが楽だった。
- ・気まずさがない(苦手意識が少なくなる)、そのまま書き出せる。

＜ロイロノートを使用した学習活動(デメリット)＞

- ・自分の力にならないし、意見交換の場では直接話した方が良い。
- ・事前では便利だと思ったが、状況に応じた使用が大切だと気付いた。
- ・相手の反応を見ることができない。相手が本当にどう思っているのかが逆に気になってしまう。

7 まとめ

現在、GIGA スクール構造の推進に伴い、1人1台端末が整備されている。また、探究的な学習のサイクルの1つに「まとめ・表現」という項目がある。生徒の感想にあるように自分の考えを伝える方法は「対面型」のスタイルが好ましいと考える。私自身、本校にはコミュニケーションをとることを苦手とする生徒が多いと感じていた。しかし、実際に生徒を観察していく中で「苦手意識があるだけで、本校の生徒でもできる」という認識が変わった。引き続き、主体的・対話的な学びができるような授業を展開していきたい。最後に、ICT 機器を使用することを目的とするのではなく、あくまで手段の1つとして効果的な活用となるよう努めていく。

本研究報告書は、令和7年3月14日までに当該地区の主管校に提出する。

名古屋地区においては、旭丘高校、千種高校、城北つばさ高校、旭陵高校、愛知総合工科高校は瑞陵高校へ、明和高校、守山高校、愛知商業高校、中川青和高校は名古屋西高校へ提出する。